

2018年3月10日発行

「不利益」から見た手紙のコミュニケーション価値

宮 田 穰

相模女子大学紀要 VOL.81 (2017年度)

「不便益」から見た手紙のコミュニケーション価値

宮 田 穰

The communication value of Letters on “Benefit of Inconvenience”

MIYATA Minoru

Abstract

In modern society, technological innovation is daily being pursued with the aim of improving the convenience for humans. SNS becoming a daily part of our lives is an example in the field of communication. LINE and Twitter are now used by a wide range of generations.

However, the more convenience people have in your everyday life, the more vulnerable they become towards the trouble that directly leads to its convenience. Also, troublesome and inconvenient skills such as conveying one's thoughts through handwritten letters tend to become avoided. As a result, people end up abandoning the ability they once acquired or the skills that could be obtained with some training.

In this research note, I reconsidered the communication value of letters that have been accepted by many people beyond the time and organized them hypothetically by focusing on "letters" which is one of the communication means that is currently being lost. In the consideration, I considered the case by recognizing recent years' novels, criticisms, and artworks with letters as motifs, with a viewpoint of "Benefit of Inconvenience" as a clue. Also, as the hypothesized values, I point out (1) diversity of expression, (2) time load, and (3) ability to stock. These values are closely related to "self-esteem," "accumulation of thinking," and "accumulation of things that have a form."

Key Words : Communication, Media, Letter, Media Richness, Benefit of Inconvenience

1. はじめに

現代社会では、人間にとっての利便性向上を目指し、日々技術革新が進められている。近年の話題でいえば、自動車の自動運転技術の向上や、日常生活におけるさまざまな場面でのIoTの適用、そしてAIによるロボットの多様な能力開発などに認められる。

コミュニケーション領域では、インターネットによるSNSの日常化が挙げられる。LINEやTwitterは、スマートフォン（以下、スマホ）の利便性や機能の向上に伴い、世代を超えて利用者の幅が広がっている。いつでも、どこでも、LINEを通じて友人や家族とつながっていることが当たり前となり、コミュニケーション機会も直接対話することや通話で話すことよりも多くなっている。

しかし、日常生活のさまざまな場面で利便性が向上することは、人間にとって都合の良いことばかりとは限らない。それは、従来日常の中で当たり前に行われてきたことが、自動化などによるブラックボックス化が進むことを意味する。たとえば、インターネット環境に依存した仕事の仕方が当たり前になっているオフィスでは、通信障害やネットワークのシステムダウンが生じ、日常的に利用していた機能が停止すると、それに関わる作業や行為は一気にストップしてしまう。そして、仕事を進めていく上で代替手段を身につけていなければ、そのオフィスでは全く身動きが取れなくなってしまう。つまり、日常生活の中で利便性が向上すればするほど、その利便性に直結するトラブルには脆弱になってしまう。そのようなジレンマが、現在必然的に生じることになる。

さらにいえば、利便性の向上に身を委ね過ぎてしまうことで、かつて身につけていた能力や、多少のトレーニングによって身につけられたはずの能力を自ら放棄してしまうことにつながる。たとえば、手書きで文字を書くことは、コミュニケーションの基礎能力の1つである。しかし、日々インターネットによるコミュニケーションにさらされ、手書きで文章を書く機会が多くの人から失われることで、多くの漢字が書けなくなってしまう。それだけではなく、自ら手書きで文字をしたため、相手に想いを丁寧に伝えるようなコミュニケーション能力そのものが、低下ないし喪失してしまう。それは、人間が古代に生み出し、永く愛用してきた「手紙」のようなコミュニケーション・メディアの価値喪失を意味する。さらに、一度失われた活用能力を再生することは容易ではないと考えられる。

以上のような、ネットワーク社会における利便性向上の行き過ぎに伴うジレンマを克服し、人間のコミュニケーションにおける選択可能な能力の多様性を永く維持するためにはどうすればよいか。さらに、これからの望ましいコミュニケーションのあり方について、後戻りできなくなる前に、立ち止まって再考しておく必要があるのではないか。このような問いかけが、今回の研究テーマへの想いであり、背景でもある。

2. 手がかりとしての「不便益」の考え方

今回の研究テーマでは、考察を進めていく前提として「不便益」という考え方に注目し、手がかりにする。

この考え方は、20世紀末頃、片井修氏（京都大学名誉教授）が、工学部の研究室でのミーティングでメンバー全員に向けて語った言葉とされている。その言葉の定義を改めて行った川上浩司氏（京都大学教授、システムデザイン）によると、「不便は大切なことであり人が本来のあり方であるうえで不可欠なものであるという意味」（『不便から生まれるデザイン』p.211）だったと捉えている。

川上氏ご自身は、不便益に関する主要な論文（2009）の中で、次のように定義をしている。

「すなわち「不便益」とは、…「便利」だけを注視する事によって見過ごされてしまったが実は重要であった別の益を指し、「不便益のシステム論」とは、…便利（省労力）という益に過大な重みを付けることなく他の益に注目してシステムを構築する方法論と定める」。

なお、川上氏はこの定義の前提として、「便利」とは「特定のタスク達成に省労力である」とし、労力には「時間・物理的操作」に関わるものだけでなく、「心理的負荷」も含めている。

以上を整理すると、「不便益」とは、あえて労力をかけることにより、益が得られるだけではなく、それが心身ともに「人間の本来のあり方」につながるものといえる。このような点に、不便益の目指す方向が示されている。また、不便益の考え方に基づく仕組み（不便益システム）は、ある意味で「完成形」といえる。補足すれば、そのようなやり方でしか得られない益が明確に存在し、それは時代を超えて通用する方法論になりうるという意味が含まれている。

3. 研究目的と方法

まず、今回の研究ノートの目的を簡単にまとめておく。

本研究ノートでは、以上のような「不便益」の考え方をコミュニケーション領域に敷衍したとき、コミュニケーションとしての不易な価値を見出しているかについて、考察し明らかにすることにある。そして、その象徴の1つに挙げられるものとして、「手紙」を採り上げる。

「手紙」は、日本に限らず、世界中で古代ローマ時代から利用されてきたコミュニケーション手段である。歴史的には、素材として羊皮紙が使われたり、木簡や石文のような、紙以外のものも使われたりしてきた。

ただ、今回対象とするのは、日本において、明治時代初期に郵便制度が整備され、現在まで運用されてきたスタイルの手紙、すなわち「便箋と封筒、切手を用い、手書きでしたためられたもの」に限定したい。

その理由は、そのような手紙は現在でも運用されているスタイルであり、多くの現代人の利用実感がかりうじて持てるものだからである。ちなみに、日本ではこのような手紙が最も利用されていた時期は、昭和30年代とされている。当時は、インターネットはもちろん、電話も個人レベルで気軽に使えるものではなかった。そのような中で、個人が手軽に安く利用できるコミュニケーション手段として、手紙が日常的に広く利用されていた。とりわけ文通は盛んに行われ、恋文などの依頼を請け負う代書屋も、日常生活の中で当たり前存在していた。

しかし、その後の社会情報環境の変化に伴い、徐々に手紙の利用は減少の一途をたどり、手紙文化も衰退しつつ現在に至っている。

本研究ノートでは、ネットワーク社会である現在においてもなお、「手紙」でしか得られない時代を超えたコミュニケーション価値があるか、それは何かを問い直すことに力点をおきたい。

研究方法としては、先行研究や関連する調査結果を確認した上で、手紙のコミュニケーション価値を示唆する小説やアート作品を数点採り上げ、テキストとして考察していく。そして、そこで得られた気づきを整理し、仮説イメージと重ねてみる。今回は、厳密な仮説検証ではなく、あくまで価値イメージを明確にすることを目標としたい。

4. 仮説イメージ

最初に、時代を超えた手紙の価値について、現段階でどのような仮説イメージが描けるかについて、まとめておきたい。

まず、コミュニケーション論から見た手紙のオリジナリティとなる特長について述べる。

1つは、表現の幅が広いことである。手紙を構成する素材としては、便箋、封筒、筆記具、インク、そして切手が挙げられる。また、手紙の内容はいうまでもなく、手書きでしたためられることで、書き手に関するさまざまな手がかりが示される。つまり、送り手らしさが工夫次第で、さまざまに表現できる。そして、手書きの手紙を出す行為自体に、送り手らしさ、すなわち送り手の「分身」のような存在感がすでに内包される。

もう1つは、時間をかけることである。文面を考え、試行錯誤し、文面に落とし込む。そして、推敲を重ねる。唯一の読者である相手へのイメージを膨らませながら、最適な表現を模索する。そして、清書し完成させる。その後、封書やはがきの形に即していくつかの取捨選択が行われ、ようやくポストに投函され、郵便システムにより早くても翌日以降に届けられる。しかも、受け手がすぐに読むとは限らない。ようやく受け手が文面を読み始めるまでに、さまざまな時間がかかる。いうまでもなく、返信する場合にも同様な時間が介在する。要は、必要な時間をかけ1つひとつステップを踏みながらコミュニケーションしていく手段が、手紙の基本スタイルである。

さらに加えれば、形ある「モノ」として届いた手紙は、受け手により保管されることが多い。それは、相手への想いを形にした贈り物としての意味とともに、再読されることをも意味している。つまり、相手に関するさまざまな想いや手がかりが、受け手の気持ち次第で手元にストックされていくのである。そして、同じ相手から届けられる手紙が時間とともに積み重なっていくことで、相手の時系列的なデータベースが作られていく。

以上を簡潔な視点として整理すれば、①表現の多様性、②時間負荷性、③ストック性、といえる。このような手紙の特長を踏まえたとき、次のような手紙の価値への仮説イメージが表現できる。

手紙とは、送り手らしいまとまりのある存在イメージを保ちつつ、さまざまな時間をかけながら受け手にメッセージが届けられるメディアであり、コミ

ユニケーションの仕組みである。そして、手紙により送り手が受け手に対して多大な影響をときに及ぼすことができ、そして継続的な関係構築がときに促進される。さらに、その関係は時間とともに、モノとしての手紙という顕在化された形でストックされていく。

以上のような手紙の価値は、時代を超えて不易なものとして保たれ、長い歴史を経て世界各地で受け入れられ、現在に至っている。

5. 手紙の現状

それでは、次に切り口を変え、近年の手紙がどのように利用され、その価値が認識されているかを、いくつかの手がかりからみていく。

まず、「文通」の現状を眺めてみる。ここで「文通」を採り上げる理由は2つある。ひとつは、手紙が私信であること、もう1つは継続的なやり取りが期待できることによる。

手紙一般では、DMなど規格化された大量の手紙や、印刷された業務用の手紙が多く含まれてしまう。それに対し「文通」の場合は、基本的に「手書き」による手紙のやりとりが想定できる。手書きによる私信は、手紙の原初的なスタイルであり、個人間のコミュニケーション価値が、最も反映されやすいと考えている。

さて、文通を行うことを主とした会員組織である「郵便友の会」は、昭和24（1949）年に誕生した。その会員数は、昭和30年代（1955-64）が最盛期であり、約30万人で推移していた。その後、同会は平成13（2001）年にPFC（青少年ペンフレンドクラブ）と改称され現在に至っているが、平成18（2006）年には、約5000人にまで会員数が減少した。ところが、その後じわじわと会員数が増加に転じ、平成28（2016）年時点では約15,000人となっている。

ここ20年ほどの期間で、文通が減少してきた背景には、何よりもインターネットの普及が挙げられる。加えて、個人情報保護への意識の高まりもある。2005年には個人情報保護法が施行されたことが、その減少に拍車をかけている。ただ、そのような中で、匿名で文通ができる仕組みができ始め、少しずつ文通への関心が認められるようになった。もちろん、最盛期とは比較にならないが、再び関心を集めつつあることは事実である。

産経新聞（2016/02/29付）には、近年の文通の盛り返し傾向について、次のような紹介記事が掲載さ

れている。

「見知らぬ人と手紙を通じてコミュニケーションを楽しむ文通が今再び注目されている。インターネットが普及し、SNSなどデジタルの世界で交流する人が多い中、便箋に手書きし、投函した後返事を待つというアナログな手順の新鮮さが見直されているようだ。（中略）事務局の富沢隆さんによると、現在の会員の8割以上は女性で、「30～50代が中心だが、最近は20代も目立つ。書き手の思いが伝わりやすい肉筆の文字の温かみが受けているようです」という。」

この記事の取材先である「文通村」(株式会社文通村) がスタートしたのは、平成21（2009）年と、現時点でまだ10年にも満たない。ただ、インターネットが日常化している現在だからこそ、文通を通してコミュニティを作り、文通文化を社会に残していこうという理念が、同社ホームページで紹介されている。

なお、同社の文通事業の仕組みについては、ここで触れないが、最新の会員名簿（2017/09/10）によると、以下のような会員属性が示されている。

	男	女	計
～20代	14	183	197
30代	15	238	253
40代	17	207	224
50代	15	116	131
60代～	21	32	53
計	82	776	858

表1 会員属性（年代別、性別）

単純集計による会員属性（表1）を見てみると、次のような特徴を読み取ることができる。

①性差では、女性がほぼ9割（90.4%）を占めており、女性主体のメディアとなっている。

②年代別では、30～40代が多く半数以上（55.5%）を占めている。20代も2割以上（23.0%）占めており、SNS利用が多い世代の割には、文通利用も目立っている。

以上の特徴を踏まえたとき、文通がインターネットでのコミュニケーションの代替的な役割を担っているというより、満たされないニーズを補完する位置づけにあると考えられる。

では、次に手紙の価値に関わる調査データを参照する。

日本郵政公社郵政総合研究所（2007年当時）の大江氏は、「コミュニケーション手段に関する意識調

査」(2005年10月、インターネット調査)を実施し、次の点を明らかにしている。

①手紙とメールに対する印象の比較について、コレスポネンスマップに落としたところ、「手紙⇒フォーマルさ+思いの伝達」、「PCメール⇒非フォーマルさへの懸念」、「携帯メール⇒気軽+無イメージ」といった特徴が示されている。

②手紙を書く理由として、因子分析によると、「周辺影響因子」(親、友人、学校など)、「記録・確実因子」「儀礼因子」「楽しみ・付加価値因子」が抽出されている。

③手紙に関する感じ方については、因子分析によると、「保存因子」、「絆因子」、「読み返し因子」、「時空超越因子」が抽出されている。

④手紙を書く層は、データマイニングによると、「手紙をもらったことがある」、「女性」であって、「高学歴」、「時空超越性評価度&読み返し度の高い層」だと総括されている。

大江氏は、さらに女子中高生6名、および男子大学生6名へもグループインタビューを行っている。女子中高生の反応として特徴的な点は、「書くこと自体は好き」だが、「封筒・便箋・切手へのこだわりは希薄」だとし、「字体で性格が伝わる」、「同封物が可能」、「(緊急性において)メールでなくてもいいのが手紙、でも手紙じゃなければならないのも手紙」だと、手紙の特別感が認識されている。さらに「ポストを開けて手紙が入っていると嬉しい」という発言も目立っている。

一方、男子大学生の場合は、「手紙を書く機会は、ここぞというときであり、書くとなったら、何時間も費やす、便箋を買いに行くこと自体が新鮮であり、書きなれていないので、それもまた新鮮」だという発言が目立っている。また、手紙を書かなくなった理由として、「手紙の価値がより高尚なものに変化した」ことを挙げている。「面倒くさがりが手紙の価値であり、当方の思いを伝える代理言語」だと認識しており、手紙を書くことのハードルの高さが、より強く意識されていることが示されている。

大江氏は「おわりに」で、今回の定量分析を通して、「メール(携帯電話)と手紙の競合関係に関する仮説」、「昨今の手紙離れは、メールの普及により加速された」といった仮説は、否定されたと述べている。そして、「個人間通信における「手紙」の意義は、メディアの多様化の中で変容しつつも、利用者には認知されている」と締めくくっている。

ここで改めて、手紙の現状をまとめてみよう。

まず、「文通村」の会員属性分析や、大江氏の調査分析を振り返ると、手紙利用者には共通する属性がみられる。その利用者の間では、手紙は独自の価値が認められるメディアとして意識されており、SNSや携帯メールに代替されるものではないことがわかる。

そして、その独自性は、個人間の絆を築くことや、初めて読むときだけでなく再読もできる保存性に、とくに示されている。また、手紙を書く行為には、家族や友人、学校など周りの影響が大きいことから、真似る雰囲気や一定の学びが必要なことがわかる。

6. 事例検討

次に、4つの手紙をモチーフとした作品を事例として、手紙の価値分析に移っていききたい。

今回事例として採り上げた作品は、インターネットが日常化した今世紀以降に話題になったものから選定した。小説では、手紙によるコミュニケーションが物語の中心になったもの。評論では、著名人の手紙に託す想いを扱ったもの。そして、アート作品では、形あるものとしての手紙の価値を顕在化させたものである。いずれにしても、現代でもなお手紙の存在を前提としなければ、成立しない世界を描いたものといえる。

なお検討にあたっては、すでに仮説で示したように、①表現の多様性、②時間負荷性、③ストック性に注目しつつ、分析を進めていきたい。

6.1.『ツバキ文具店』(2016) 小川糸著

まず、ストーリーの設定と手紙との関わりを簡単にまとめると、次のようになる。

「ツバキ文具店」とは、鎌倉の山の手ふもとにある、小さな古い文房具店である。その店主の雨宮鳩子が主人公で、日々手紙関係の文房具を商いつつ、手紙の代書を請け負っている。代書といっても、手紙だけではなく、和食屋のお品書きから祝儀袋の名前書きまでである。

物語は、離婚の報告、絶縁状、借金の断りの手紙といった、さまざまな手紙の依頼に鳩子が時間をかけて悩みながら、最善の回答を手紙というスタイルで示していく流れで進んでいく。

依頼された手紙はいずれも難題ばかりだが、単に文面の工夫だけでなく、どのような道具(紙や筆記具など)で表現するかまで考え抜き、回答としての手紙が完成していく。

依頼者と主人公との関係を一般化してみると、主人公は悩みを抱えた依頼者のカウンセラーのような立場で、相手と向き合っている。そして、診断し、処方箋としての手紙を差し出す。そして、依頼者の悩みが解決方向に向かっていく。

具体的な悩みを順に挙げると、次のようになる。ペットの悲報を知り合いに伝える。結婚を祝ってくれた人たちに離婚報告をする。幼馴染で結ばれなかった婚約者へ、自分が大手術する前にお礼を兼ねた近況報告をする。長年の友人から来た借金の求めを断る。汚文字(字が汚い)女性が、姑の誕生日にお祝いカードを渡す。天国の旦那さんから認知症気味の連れ合いにメッセージを届ける。妹のようにかわいがってきたはずの相手に絶縁状を出す。生徒への行き過ぎた干渉が絶えないお茶の先生へ絶縁状を出す。

以上の場面で、回答として差し出される手紙は、相手に送り手の真意を正確に伝えるだけでなく、送り手と受け手がともにけじめがつけられるものとなっている。言い換えれば、手紙を通して双方の深い理解のもとで、その関係を再構築することにつながっている。

そのような仕掛けとなる手紙を書くために、主人公は時間をかけて悩み抜き、送り手と受け手の双方を深く理解したうえで、最もふさわしい表現を試行錯誤し工夫する。その結果、双方の心の中には相手への深い思いがしっかりと根付く。おそらく、今回届けられた手紙は、すぐに捨てられることなく、想いのこもった贈り物として、受け手の元でストックされていくだろう。

表現の多様性については、同じ手紙といっても依頼者1人ひとりへのオーダーメイドである。断りの手紙は、毛筆でしっかりと書く。絶縁状は左右逆の「鏡文字」で書く、離婚報告は手書きではなく敢えて活字で綴る。このように、文面に載せるスタイルは実に多様である。

時間負荷性については、完成形としてどのような手紙に仕上げるかについて、依頼者の代わりに主人公はとことん時間をかけて悩む。そして、いずれの手紙も時間をかけて作成され、タイミングを見計らって投函される。このような時間は、受け手にとって待たされる時間であり、長く待たされたあげくに届けられる手紙の存在感は大きい。また、予期せぬ「来訪者」としての手紙に驚かされる場合もある。

いずれにしても、時間負荷性は手紙の存在感を高める価値につながっている。ちょうど美酒を作る仕込みの時間に似ている。

そして、ストック性については、手紙に込められた想いの重さゆえに、その手紙は簡単に捨てられることはない。手紙は、メッセージを伝える手段であるだけでなく、受け手への贈り物としての意味も伴っているからである。比喩的に言えば、送り手の「分身」として贈られる物が、手紙というスタイルになる。まさに、マクルーハンが主張する「メディアはメッセージである」ことを、手紙は如実に示している。

以上のように考えると、『ツバキ文具店』で描かれる手紙は、3つの仮説をいずれも強く裏付けている。もちろん、この作品はフィクションではあるが、逆に手紙の本質をフィクションの力を借りて、強調しているとみることもできる。

ちなみに、この作品の続編として『キラキラ共和国』が2017年に出版されている。このことは、手紙をモチーフにした小説が、現在でも十分多くの人に受け入れられている証左だといえる。

6.2.『手紙屋』(2007) 喜多川泰著

この作品は、タイトルがそのまま手紙に直結している。ストーリーは、主人公である就職に悩む大学4年生が、手紙屋との10通の手紙のやりとりを通して、就職への考えや意識が大きく変わっていき、就職という人生で初めての大きな壁を何とか乗り越える、そのプロセスが描かれている。つまり、人生の節目を乗り越える上で、手紙がその人の精神的な成長を促し、決意まで導いていく役割が描かれている。

この作品では、手紙のやりとりは「桜の季節」から「黄色や赤の紅葉が美しい季節」まで続けられている。およそ1か月で2通のやりとりとなっている。このペースが、主人公にとって文通を通して、ゆっくりと考えを深め、自らの意思を固めていくために必要な時間となっている。

『ツバキ文具店』での手紙の扱いは、あくまで依頼者の代理として主人公が最適手紙を作成し、受け手との関係を変えていく仕掛けとして位置づけられている。一方、『手紙屋』では悩みを抱える依頼者と手紙屋が、手紙のやりとりを通して向き合い、お互いの意識を変化させていく役割を手紙が担っている。つまり、前者では、代書屋が送り手のカウンセラーのように、受け手との間を取り持つ立ち位置にいるのに対し、後者では、手紙屋が受け手となって、手紙を通して主人公である送り手のカウンセリングを行う立ち位置を取っている。そのため、受け手である手紙屋本人のことは、送り手である主人公

と同様、文面を通して推察するしかない。

この作品では、手紙による表現の多様性は、あまり示されていない。丁寧な文面を相手に届けることがすべてとなっている。

ただ、注目できる点としては、主人公が手紙の書ける環境の整った喫茶店にたまたま入り、手紙屋の広告を観たことがきっかけとなり、見ず知らずの相手を信用し、手紙のやりとりを始めていることである。

つまり、相手に関する情報がほとんどなくても、丁寧に書きしるされた文面を通して、相手のイメージを膨らませながら、やりとりの回数とともに相手への信用が高まっていく様子が描かれている。手紙をやりとりし始めた頃は短かった送り手の文面が、双方ともに徐々に長くなり、9回目の手紙屋の文面は5000字を超えるところまでになる。いわば、10回にわたるやりとりの積み重ねにより、まるで相手が昔からの知り合いのような存在になっていく。このことは、直接面と向かわなくても、相手との丁寧な手紙のやりとりにより、面談を重ねるような関係が築かれていくことを示している。まさに手紙は「対話のプロセス」に近く、相手への信頼が高まればそれだけ、踏み込んだやり取りが可能になっていくと考えることができる。そして、相手のことを最初は知らなくても、丁寧な文通を続けていくことにより、昔からの知り合いのような送り手と受け手の信頼関係を築き上げるだけの力が、手紙には備わっているといえる。

時間負荷性については、すでに述べたように、月に2回程度のやりとりが手紙でなされており、やり取りをしていないときは、手紙の文面をじっくりと理解し、考え尽くして返事を仕上げていく時間となっている。つまり、やり取りの回数の少なさは、手紙に向かって考える時間の長さでもある。まさにこの作品は、手紙がもたらす、時間をかけて考えることの大切さを分かりやすく示している。やり取りを重ねるにしたがって、そのことがそれぞれの文面が少しずつ長くなっている様子に、象徴的に表れている。

そして、ストック性については、10回のやりとりが「文通」になっていることに示されている。10回の手紙は、連続する思考のストーリーであり、文通はお互いのコミュニケーションの場を、少しずつ広げていくことにつながっている。インターネットのメールやSNSでのコメントが、川の流れのようにひたすら続くフローだとすれば、手紙はやりとりを重ねるにしたがって、少しずつ水かさが増し、ストックされていく湖だといえる。

以上のように考えると、『手紙屋』は時間をかけて手紙のやり取りを続けていくこと、さらにそれらをストックしていくことで生み出されていく、コミュニケーションの場の広がりを見せているといえる。そして、3つの仮説のうち、時間負荷性とストック性の価値の大きさを強調している作品だと受け止められる。

ただ、現実にはこのような手紙のやりとりを重ねていくためには、ある程度の手紙への習熟が前提として求められる。インターネットが日常化している現在、手紙やハガキを書いた経験が乏しい若い世代が増えているが、『手紙屋』のような手紙文化を支えていくためには、年少の頃から手紙を学び、体験を通して習熟していくことが不可欠である点を忘れてはならない。

6.3.『ラヴレターの研究』(2005) 渡辺淳一著

この評論は、明治から大正・昭和にかけて熱烈に生きてきた作家や文化人の手紙の中で、最も本音が表れているラヴレター（恋文）を通して、彼らの関係を深く読み解いている。著者はラヴレターに着目した意味について、次のように述べている。

「まさしく、ラヴレターは恋する人に愛を伝えるものでありながら、その人の本音と生きた時代を現わすもので、ここに登場するラヴレターそのものが、日本の近代史といっても過言ではない。

それにしても、ラヴレターは自分の思いを凝縮させ、自らの手で書くもので、それは各々の自分史であるとともに、その人が最も燃えて高揚したときの記録でもある。」(pp.330-331)

たしかにラヴレターは、ある程度相手のことを知っている関係の中で、さらに思いを込めて相手に何かを伝え、さらなる関係を築こうとする「手紙の中の手紙」といえる。この評論で扱われている個々の手紙の紹介は紙幅の都合上できないが、有名作家がしたための手紙は、万人に対する作品とは異なり、1人の読者を想定したエッセイである点で興味深い。それぞれの手紙に共通している点は、いかに自分らしさを表現できるかであり、それが相手への思いといかに両立できるかに苦心の跡が見て取れることだ。一般の人々の場合は、ラヴレターとしての筆力が伴わないとき、かつては当たり前存在した代書屋に委ねることになる。いずれにしても、さまざまな表現の仕方に意を凝らす大元には、「自分らしさ」へのこだわりがある。ラヴレターでは、相手への思いを通して、その点が強調されている。

時間負荷性については、作家や有名人のラヴレタ

ーの場合、多作ゆえに時間をかけて苦勞して作成した様子があまり感じられない。その代り、ラヴレターが次々と重ねられていくことで、連作のようなストック性がより発揮されていく。ラヴレターが渡辺のいうように「自分の思いの凝縮」だとすれば、手紙が重ねられていくことで、その凝縮の度合い、すなわち純度はさらに高まっていく。

この評論は、あくまで作家や有名人の手紙に限ったものだが、手紙のもつコミュニケーションの力を最大限に発揮した事例集としても見ることができる。

以上のように考えると、ラヴレターは「自分らしさ」と、相手への思いをいかに凝縮し表現するかに拘りながら、ストック性が強く意識された手紙のスタイルとして理解することができる。さらに、作家や有名人であれば、時代性が組み込まれたメディアにもなる。このような手紙が、近代史の資料の1つとして価値が認められるのも、手紙の持つ中身の濃さが、その時代の社会的な価値の表現に結びついていることに他ならない。

近年、手紙によるラヴレターが少なくなってきたが、はたしてインターネット・メディアで、手紙の持つラヴレターのような機能が代替できるかどうかを、再検証してみる価値がありそうである。いずれにしても、手紙は自分らしく想いを表現する最適なメディアであることは間違いない。

6.4.『漂流郵便局』(2015) 久保田沙耶著

この作品は、現在も続けられているアートイベントを書籍としてまとめたものである。最初に、この取り組みの紹介部分を引用しておく。

「漂流郵便局(旧栗島郵便局)は、瀬戸内海に浮かぶ小さなスクリー形(スクリー)の島、栗島のおへその部分にあります。

東西の海流がぶつかり、日本最古の海員学校が存在したこの島は、かつてたくさんの物、事、人が流れつきました。

こちらは、届け先のわからない手紙を受け付ける郵便局です。「漂流郵便局留め」で寄せられた手紙たちを「漂流私書箱」で収めることで、いつか所在不明の存在に届くまで、手紙を漂わせてお預かりします。

過去／現在／未来 もの／こと／ひと

何宛でも受け付けます。

いつかのどこかのだれか宛の手紙が、いつかここにやってくるあなたに流れ着きますように。

漂流郵便局員」(p.20)

(必要に応じて、著者が読点を追加した。)

この作品は、アーティストの久保田沙耶氏が、瀬戸内国際芸術祭(2013)に向けて構想する中で生まれたものである。現在は、栗島郵便局10代目の局長、中田勝久氏と久保田氏が局員となり運営されている。

届けられた手紙やハガキは、2013年芸術祭終了時(11/4) 400通だったものが、2014年末には、累計3,346通にまでに急増している。中田氏は、手紙離れだといわれる現在、なぜ多くの手紙が漂流郵便局に届くのかについて、次のように語っている。

「だれもが胸の内に秘めた想い、聞いてほしいという願望があると思うんです。そんな思いをはがきにしたためることで、気持ちの整理はもちろん、どこか癒されるのではないのでしょうか。“こんな場所がなければ、手紙を書くこともなかった。書いて気持ちが楽になりました。素敵な機会をありがとうございます。”といった言葉をたくさんいただきます。何よりうれしい言葉ですね。」(p.46)

届けられる手紙の相手は、さまざまである。亡くなった肉親やペット、名前の知らない人、愛着のある物、神様、宇宙人、そして未来の自分などと、パラエティーに富んでいる。手紙といっても、相手が現実に生きている人間でなくてもよいとなると、自由に想像の幅が広げられる。通常であれば、「宛先不明」で戻ってくるが、この郵便局であれば私書箱に収まり戻ってこない。ある意味で、書き手の心の奥を誰かに向けて解放させられる仕掛けになっているといえる。この取り組みは、手紙に着目したアートイベントでしかないが、手紙に内在する心の中を吐露させる機能がはっきりと示されている。手紙が本来もつ、双方向のコミュニケーション手段を投げ捨て、自己表現手段として捉え直したことの意味について、久保田は次のように述べている。

「漂流郵便局をつくっていくにあたって、人間の文化は何か目に見える対象とコミュニケーションを深くとり合うことだけで生まれるわけではないと思うようになりました。コミュニケーションのとれないものに対しても、やまない試行錯誤を繰り返すことこそが、文化の発生原理なのではないかと今、感じています。」(p.158)

このことは別な言い方をすれば、そこに届けられる手紙は、自分とのコミュニケーションの結果生み出されたものといえる。つまり、手紙のスタイルには、自分と向き合い思考を重ねることを促す機能が内在している。そして、誰かを想定し深く思考を重ねながら、心の中を吐露すること、つまり、それは自分自身の再生につながっている。

以上のように考えると、この取り組みの場合、表現の多様性では、現実を超えた相手にまで対象を広げることで、より幅広い表現につながっている。また、時間負荷性では、自分の心を解放させるために、時間をかけた深い思考が伴っていることを示している。ただ、ストック性については、この取り組みでは、手紙の内容ややり取りの蓄積は認められない。しかし、すでに現実には存在しない相手に出した手紙であっても、必ず届けられ送り手に返却されない点に、コミュニケーション実感を送り手にもたらしめている。つまり、「漂流郵便局」の取り組みは、手紙の持つ表現の多様性とそれを生み出す時間負荷性に重点を置いた、手紙の表現可能性を広げるイベントとなっている。

なお、類似のアートイベントには、「赤崎水曜日郵便局」がある。これは、熊本県津奈木町の「つなぎ美術館」の取り組みである。この美術館は、2001年に開館し、津奈木町により運営されている。しかし、町外からの来訪者が多いわりには、町内の関心が低調だったため、住民との協働スタイルによる住民参画型のアートプロジェクトが2008年から開始された。その企画の1つとして、2013年に3か年事業としてスタートしたのが、「赤崎水曜日郵便局」であり、その概要は次のようになっている。

つなぎ美術館では、地域資源の活用も兼ね、2010年に廃校となった旧赤崎小学校を「赤崎水曜日郵便局」として、2013年6月19日にスタートさせた。この郵便局では、全国から「水曜日の物語」を募り、手紙を送ってくれた人には、別の誰かの手紙がランダムに選ばれ送られてくる。水曜日へのこだわりは、「週の通過点となり記憶に残りにくい1週間の真ん中、水曜日の出来事に焦点をあてることで日常性を大切にし、他人の日々の暮らしにも思いを馳せてほしいという願い」に基づいている。イベント終了までの3年間で届けられた手紙は9000通を越え、それぞれの手紙には、「老若男女の悲しみ、喜び、驚き、あるいは平凡な日常の出来事など、実にさまざまな物語が素直に綴られています。」（『赤崎水曜日郵便局』p.251）と紹介されている。

このイベントと「漂流郵便局」の違いは、受け手が実在していること、手紙のやりとりが行われることである。全国から届けられた9000通を超える手紙は、知らない誰かに自分の想いを伝えたいという動機に支えられている。手紙が、自分の内面を吐露させるだけでなく、それを誰かに伝えるところまで期待されるメディアであることが、改めてわかる。

7. 考 察

以上の事例の他、調査データも踏まえて、手紙の持つコミュニケーション価値について考察していく。

まず、先述した事例を仮説イメージで挙げた視点と重ねたとき、表2のように整理できる。

	表現の 多様性	時間負荷性	ストック性
ツバキ文具店	◎	◎	○
手紙屋	○	◎	◎
ラヴレターの研究	○	○	◎
漂流郵便局	◎	◎	△

表2 事例と仮説イメージとの関係

どの事例も、視点のうちいずれかに、少なからず比重が置かれている。

まず、表現の多様性については、モノとしての手紙から伝わる「その人らしさ」が認められる。『ツバキ文具店』では、便箋や封筒、切手、筆記具にさまざまな工夫が凝らされている。そして、文面の工夫も依頼者に成り代わって、考え抜かれたものとなっている。

そこまで、手紙に凝る理由は、「その人らしさ」の追究である。手紙という形をとりながらも、いかに送り手の「分身」に近づけるか。送り手のまとまりのある存在感を、できるだけ壊さずに相手に想いとして伝えることが、手紙のメディアとしての特性だといえる。そのためには、直筆で綴られた文面であることが必須となる。

すなわち、手紙の価値の1つは、送り手の「分身」を表現できるだけの工夫が多様にできることである。

時間負荷性については、『手紙屋』にみられるように、時間をかけることが思考を重ねることに直結している。つまり、手紙というスタイルを介在させることによって、送り手の思考を促し、それをストーリーのあるまとまりとして仕上げていくように送り手を導いていく。そして、手紙に時間をかけることは、手紙の価値の増幅につながっていく。それゆえ、手紙の文面は何度も推敲され、その分だけ相手への影響力が強まっていく。

すなわち、手紙の価値のもう1つは、時間をかけることで送り手の思考を促し、受け手への影響力を強められることである。

そして、ストック性については、『ラヴレターの研究』にみられるように、想いを相手に何度も届け、それを積み重ねていくことができる。また、ストックされるものは、相手への想いを綴った文面だけではなく、贈り物としての手紙もまたストックされていく。「漂流郵便局」は、多様な想いの詰まった倉庫のようなものである。

すなわち、手紙のさらなる価値の1つは、送られた手紙は形としてストックされ続けていくことであり、ときに再読もできる点にある。

以上をまとめると、手紙は送り手の「その人らしさ」をまとめた形で保ちつつ、思考を重ねた想いを通して、受け手に大きな影響力を繰り返し及ぼすことができるメディアだといえる。

そして、手紙によるコミュニケーションを通して、送り手と受け手の双方が、意識や関係を再生させていくことができる。

このような手紙のコミュニケーションのイメージを描いたとき、それに匹敵するコミュニケーションは、対面対話すること以外にはない。そして、いずれもが古くから時代を超えて続けられてきたコミュニケーション・スタイルである。つまり、手紙は対面とともに、不易なコミュニケーションに他ならないことが改めてわかる。

8. おわりに

この研究ノートでは、手紙を通して、コミュニケーション価値を考察してきた。それは、研究テーマのとば口に差し掛かった段階でしかない。

手紙の価値については、それが社会に広く再認識されれば、ネットワーク社会である現代においても、文通など手紙を活用したコミュニケーションが安定に行われることが期待できる。

次なる研究課題は、2つある。1つは、実験によって手紙ならではの価値を明確に検証することである。そして、もう1つは、手紙を日常的に学び、経験できる環境を、今後いかにして作り上げていけるかを検討することである。

手紙は、古くて新しいテーマである。そして、日常の中に存在するコミュニケーション価値を現実的に考えるためには、手紙のように、まず足元に注目することが大切だと、常に確信している。

参考文献

(書籍)

川上浩司『不利益から生まれるデザイン』化学同人、2011

川上浩司『ごめんなさい、もしあなたがちょっとでも行き詰まり感じているなら、不便をとり入れてみたらどうですか? ～不利益という発想』インプレス、2017

渡辺淳一『ラヴレターの研究』集英社文庫、2005

喜多川泰『手紙屋～僕の就職活動を変えた十通の手紙～』ディスカバー・トゥエンティワン、2007

喜多川泰『手紙屋～私の受験勉強を変えた十通の手紙～』ディスカバー・トゥエンティワン、2008

小川糸『ツバキ文具店』幻冬舎、2016

小川糸『キラキラ共和国』幻冬舎、2017

久保田沙耶『漂流郵便局』小学館、2015

楠本智郎『赤崎水曜日郵便局』KADOKAWA、2016

宮田穰『昭和30年代に学ぶコミュニケーション』彩流社、2016

小松茂美『手紙の歴史』岩波新書、1976

高橋安光『手紙の時代』法政大学出版局、1995

サイモン・ガーフィールド、杉田七重訳『手紙 その消えゆく世界をたどる旅』柏書房、2015

小林正義『みんなの郵便文化史』にじゅうに、2002 (論文)

川上浩司「不利益の効用に着目したシステムデザインに向けて」ヒューマンインターフェース学会論文誌 vol.11, no.1、2009

大江宏子「多様化するメディアの中での手紙の意義ー携帯メールとの利用比較調査を中心にー」情報文化学会誌14 (1)、2007